

一番茶の摘採期拡大のための早晩性品種の組み合わせ

茶栽培面積を450aとした場合に主要品種の‘やぶきた’を中心として早生品種の‘おおいわせ’や、晩生品種の‘おくみどり’などの早晩生品種を組み合わせることにより、適期摘採幅を14日間に拡大することができる。

農業研究センター茶業研究所 (担当者: 西澤法聖)

研究のねらい

現在茶の品種は‘やぶきた’が栽培面積の約8割を占めており、摘採適期が集中するため、早晩性品種を導入し、品種による摘採適期を拡大するための品種構成を選定する。

研究の成果

1. 摘採期は早生品種では‘しゅんめい’‘おおいわせ’が対やぶきた比で平均-3.3日と早く、年次による変動が少ない。
2. 晩生品種では‘おくみどり’が対やぶきた比で平均6.3日と最も遅く、‘みなみさやか’は、平均3.8日であるが、年次による変動が他の品種と比べて小さい。
3. ‘やぶきた’を経営面積の約50%とした品種構成で、‘おおいわせ’または‘しゅんめい’45a (経営面積比10%)、‘さきみどり’45a (同10%) ‘やぶきた’230a (同52%)、‘みなみさやか’、‘りょうふう’または‘おくゆたか’65a (同14%)、‘おくみどり’65a (同14%) とすることで適期摘採幅を拡大することができ、その幅は14日となる。

普及上の留意点

1. 同一標高の平坦地、露地栽培での試験結果であり、気象条件は、年間平均気温15.9℃、年間平均降水量2,100mmである。
2. 栽培地域の気象条件に合わせた品種の導入が必要である。

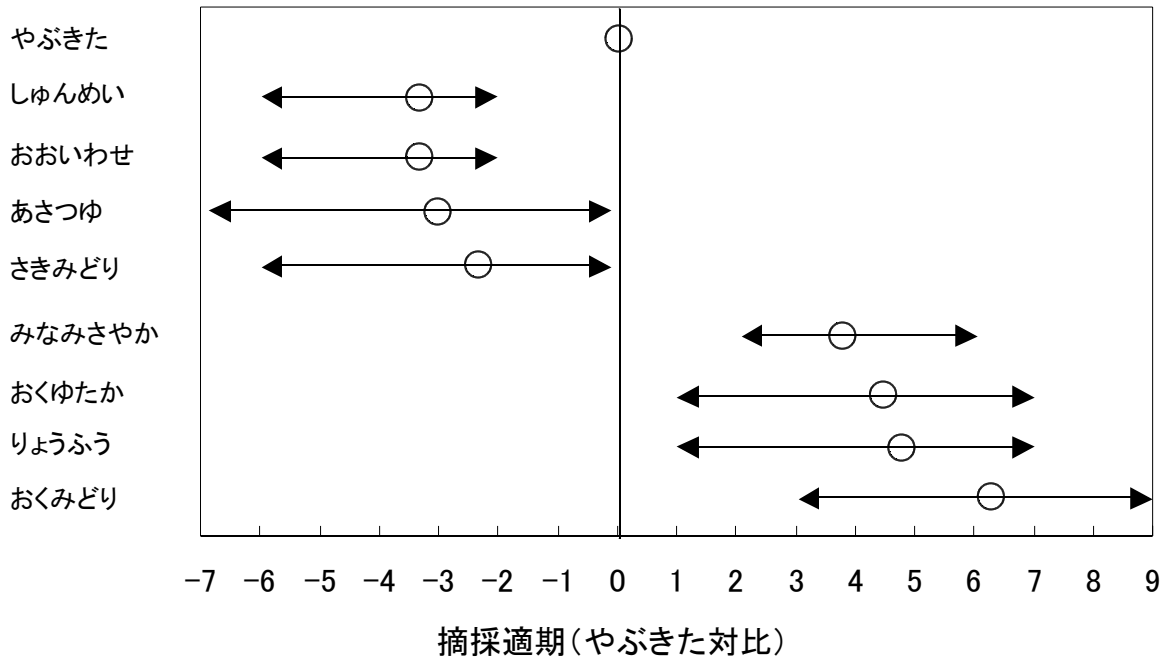


図1 一番茶の摘採時期

※ ○印は4カ年間の平均摘採適期、矢印は年次による変動を示す。

表1 各品種の特徴

品種名	特徴
しゅんめい	温和な香気で渋味が少ない。粘土質土壌では生育が劣る。
おおいわせ	成園化が早い。耐寒性がやや弱いため、寒冷地にはあまり適さない。
あさつゆ	品質は極めて良好であるが、樹勢が弱く、成園化後も収量は少ない。
さきみどり	樹勢が強く、新芽は鮮緑である。品質はやぶきたと同等で良質である。
みなみさやか	クシカカラム抵抗性を有する。香気に特徴がある。
おくゆたか	旨味が強いが摘採適期が短い。形状がやや大型になりやすい。
りょうふう	樹勢が強く多収。品質は温和である。
おくみどり	摘採期が遅れると白茎が目立つ。内質はやぶきたと同等。

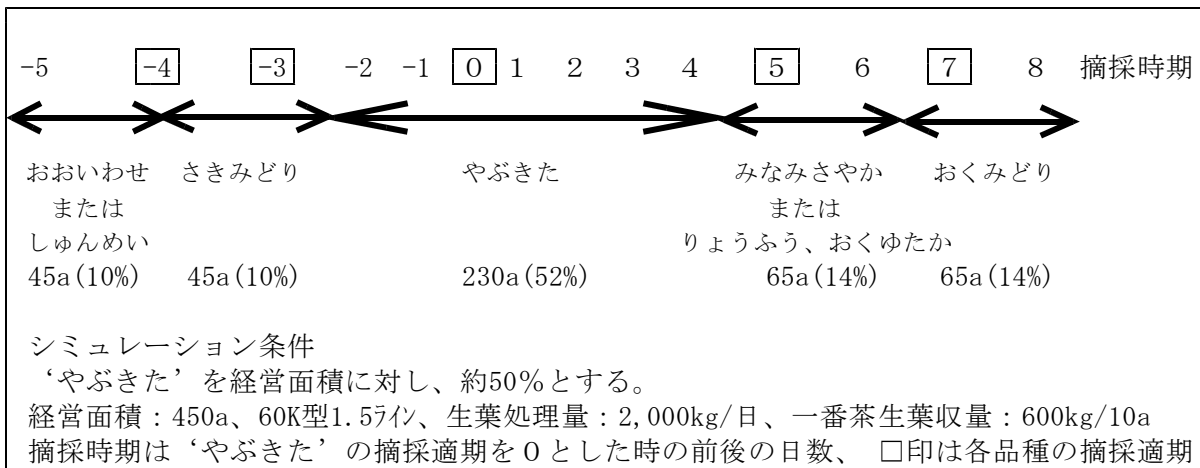


図2 摘採期拡大のシミュレーション